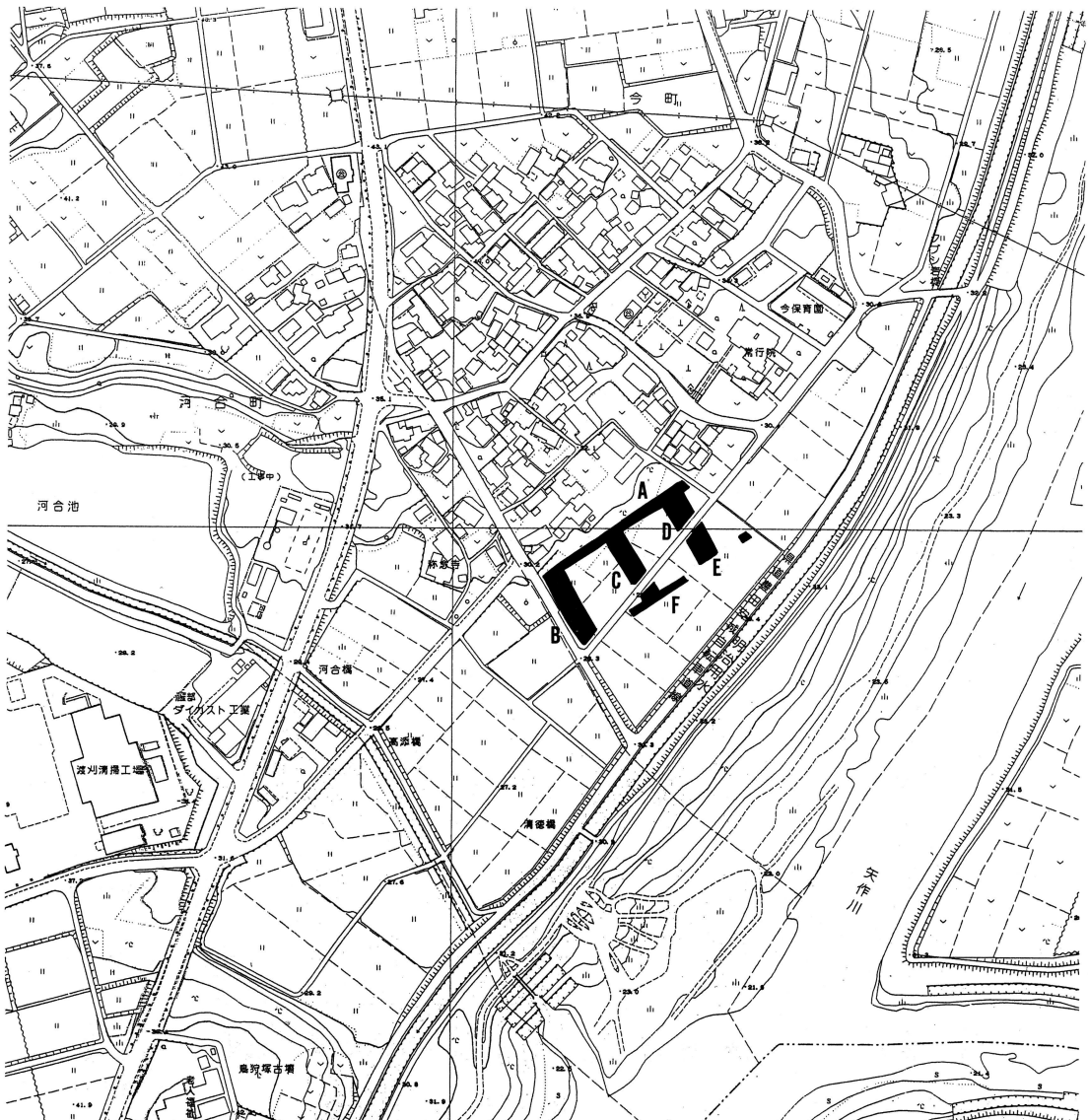


いまちょう
今町遺跡

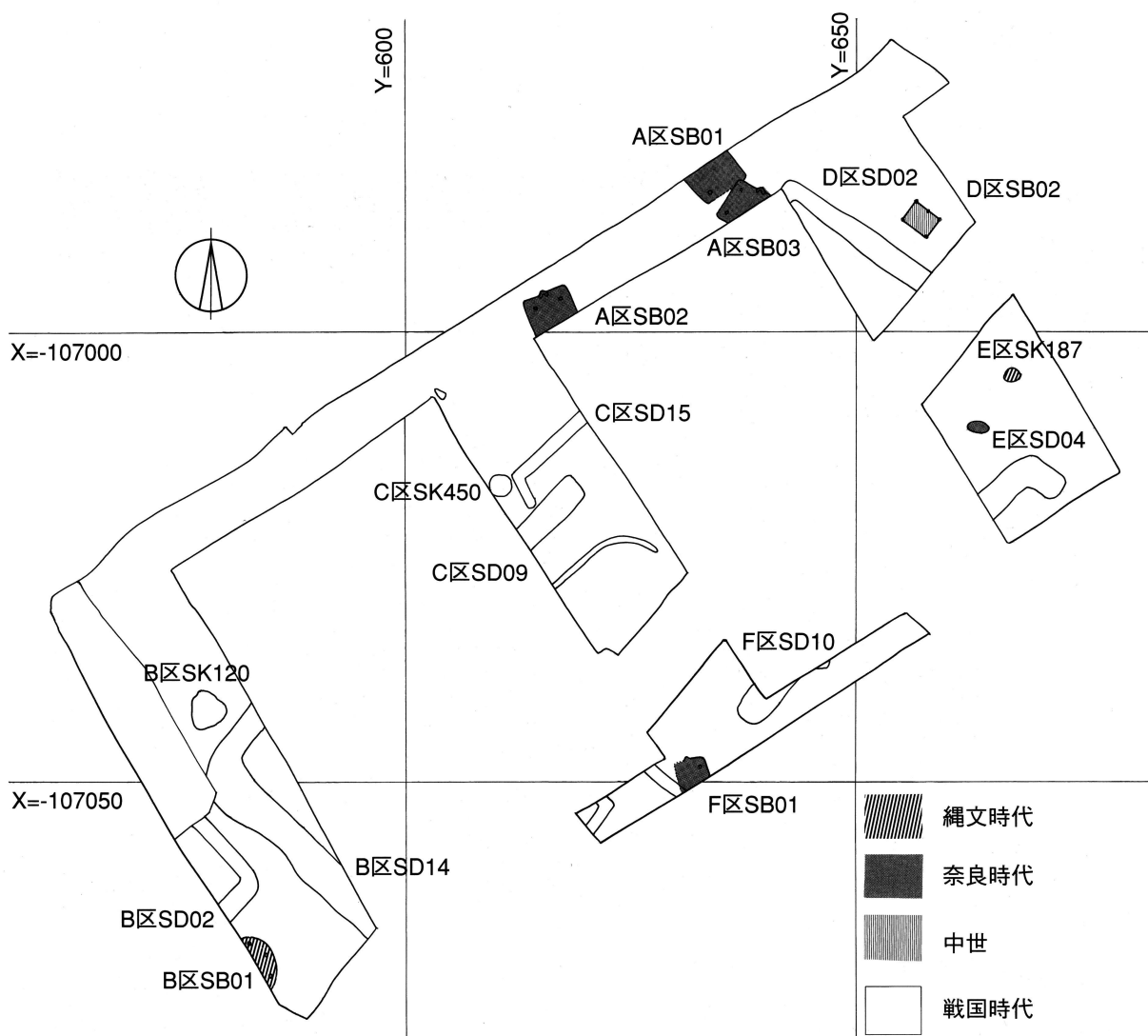
調査の経過 今町遺跡は豊田市今町元屋敷に所在する縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。矢作川右岸の碧海台地上に立地し、標高は27～28mを測る。調査は第二東海自動車道建設に伴う事前調査として、アジア航測株式会社に発掘調査作業を委託して行った。本年度は平成10年9月から平成11年2月まで4,400㎡を調査対象とし、便宜上A～F区の6調査区にわけて実施した。

調査の概要 調査の結果、2,500基を超える遺構とコンテナ数50箱以上の遺物が確認された。これらはA期（縄文時代中期後半～後期前葉）、B期（奈良時代）、C期（鎌倉時代～室町時代）、D期（戦国時代～江戸時代初頭）、E期（江戸時代）の大きく5期に分けて考えることができる。このうち、D期とE期においては調査区のほぼ全域に遺構が分布することから、この時期が今町遺跡の主体であると考えられる。



第1図 調査区位置図 (1 : 5,000)

- A 期** A期に属する遺構には、竪穴住居1棟と土坑がある。B区SB01は直径が約6mの円形(縄文時代)プランと推定される竪穴住居で、ここから縄文時代後期前葉と位置付けられる土器が数点出土した。また、赤褐色粘質土を埋土とする深さ1m前後の土坑が数基検出されており、そのうちE区SK187から縄文時代中期後半と思われる土器が出土した。
- B 期** B期の遺構には、竪穴住居4棟などが存在する。これらはいずれも方形プランを呈する(奈良時代)と考えられ、カマドが残存していたのが3棟認められた。A区SB01は一辺が5.6mの規模を持つもので、主柱穴の一つから8世紀中頃の須恵器杯身が出土した。また、A区SB02は一辺が5.3mの規模を持つ竪穴住居である。
- C 期** C期の遺構として多数のピットなどが確認されており、掘立柱建物が数棟存在したと考えられる。D区SB02は1間×2間の掘立柱建物で、このうち1基の柱穴から13世紀前半の灰釉系陶器碗が出土した。この他に、E区でC期に属する遺物が出土する柱穴が多数検出されており、該期の遺構は調査区東半からさらに東へ展開したものと想定される。



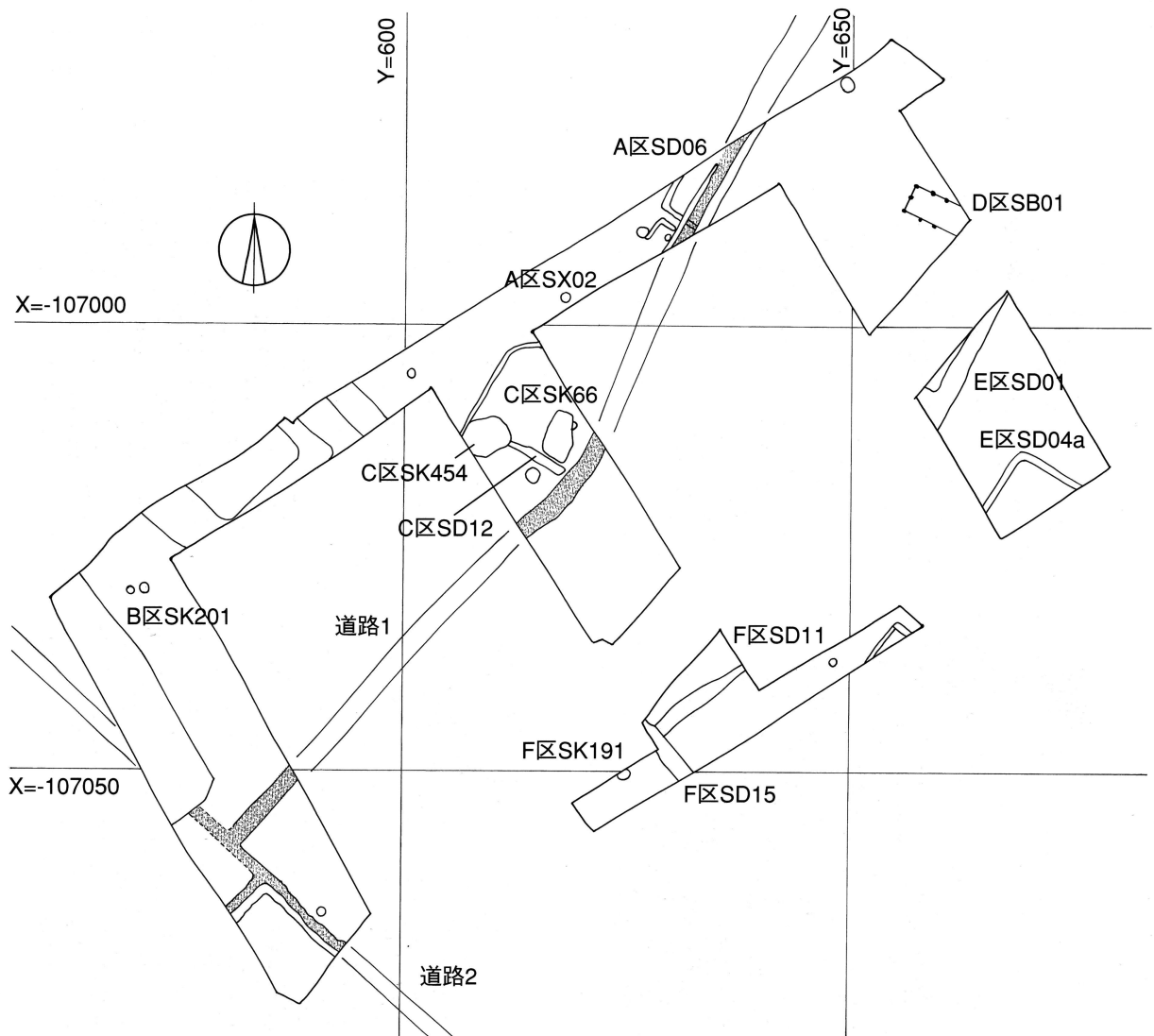
第2図 縄文～戦国時代遺構図(1:800)

D 期 D期に属する遺構には堀、井戸、掘立柱建物などがある。

(戦国時代 B区SD02・SD14、C区SD09、D区SD02、E区SD04、F区SD10は幅3m前後
～江戸時 の堀で、大半が16世紀中葉～17世紀前半に位置付けられる。これらがどのように関連して
代前期) 存在したかについては調査区の制約のため明らかにし得ないが、一辺が約100mの規模を持つ
屋敷地の存在が想定される。また、C区SD09とL字に屈曲する箱堀C区SD15で「枳
形」を形成していたと考えることも可能である。

C区南半部とE区などでは該期のピットが多数検出されており、屋敷地内に複数の掘立柱建物が存在したことが予想される。また、B区SK120とC区SK450は素掘りの井戸で、E期の井戸に比べ堀肩が大きく、上層は礫で埋め立てられていた。

D期の屋敷地の性格は、堀で囲まれ「枳形」を有する防御を意識した構造を持つこと、調査地点及び周囲に「元屋敷」、「北垣内」、「前田」といった城館に関連する地名が存在することなどから、城館跡であった可能性が考えられる。



第3図 江戸時代遺構図 (1:800)

E 期 江戸時代の遺構には道路、溝、井戸、埋甕、石敷遺構、掘立柱建物など多様なものがある(江戸時代)る。これらの遺構は大きく江戸時代前半と後半に区分することができるが、ここでは江戸時代後半の遺構を中心に記述する。

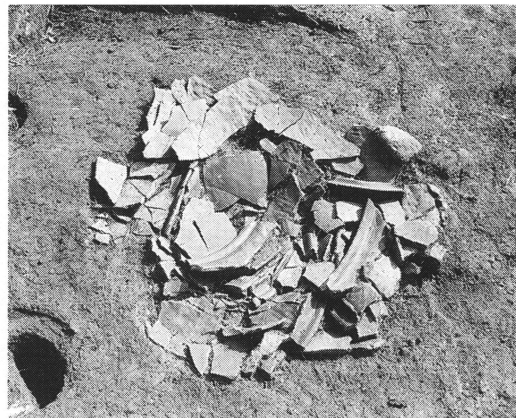
まず、道路は大きく2条(B区SF01、C区SF01、A区SF01を結ぶ道路1とB区SF02の道路2)が検出され、B区でT字に交差している。B区SF01とSF02、C区SF01は路肩が石列で護岸されており、A区SF01は側溝が設けられていた。道路1の両側に屋敷地が展開したと考えられ、C区SD12、E区SD01・SD05、F区SD15は屋敷境を区画する溝と思われる。

C区SD12は両肩を河原石で4段程度積み重ねた石組溝であるが、その周辺では水周りに関連する遺構が確認されている。C区SD12に接続する形で池状遺構C区SK454が、北東部に石敷遺構C区SK66が、南部には井戸C区SK428などが検出されている。A区～D区では根石や柱痕が残存する柱穴が多数認められ、この部分に掘立柱建物が存在したようである。D区SB01は2間×3間以上の掘立柱建物であった。

まとめ 以上、今町遺跡は戦国時代の城館跡?と江戸時代の道路に面した屋敷群が遺跡の主体となっているといえよう。付近に所在する天文12(1543)年に創始された常行院との関連が注目されるところである。(鈴木正貴)



A区SB02



A区SX01埋甕



D区SD02



C区SK66とSD12